

## 【審査論文】

## 青年期後期から成人期にわたる親の老いの認知と親に対する感謝の心理状態 および老親扶養意識との関係

池田幸恭

### Relations of awareness of parental aging with gratitude toward parents and filial responsibility: Late adolescence to early adulthood

IKEDA Yukitaka

#### 要旨

本研究の目的は、青年期後期から成人期の子による親の老いの認知について、親に対する感謝の心理状態を介した老親扶養意識との関係を明らかにすることである。20～39歳の800名へ、2017年12月にweb調査を実施し、親の老いの認知、親に対する感謝の心理状態、老親扶養意識などについて尋ねた。各指標の年代と性別による得点を比較した上で、第1水準に親の年代、親の健康状況、親との関係良好度、子の就業状況を、第2水準に親の老いの認知を、第3水準に親に対する感謝の心理状態を、第4水準に老親扶養意識を置いたモデルを設定し、父親と母親それぞれの関係で性別（男性・女性）による多母集団同時分析を行った。分析の結果、青年期後期から成人期の子による親の老いの認知が親に対する感謝を介して老親扶養意識と関連することが示唆された。父親と母親、息子と娘のすべての関係性で、親の心理的成熟を認知しているほど親に対する感謝の気持ちが大きくなり、情緒的支援志向が高まり、親の活動性の減退を認知しているほど自分が苦勞しているのは親のせいだと感じており老親自立期待が高まることがみられた。また、息子は父親の活動性の減退を認知することで負担をかけたことへのすまなさを感じて、情緒的支援志向と伝統的扶養志向が高まることに対して、娘は父親の心理的成熟を認知することで負担をかけたことへのすまなさを感じて、老親自立期待が低減し情緒的支援志向が高まることが示された。指標間の関連の一部では、父親と母親、息子と娘の関係性ごとに異なる特徴がみられた。

**キーワード：**親の老い (parental aging)、親に対する感謝 (gratitude toward parent)、老親扶養意識 (filial responsibility)、青年期 (adolescence)、成人期 (early adulthood)

#### 問題

“現代日本では少子高齢社会が進行する中で、親子関係は長期化し、生涯における親子関係の重要性が高まっている” (池田, 2023, p.67)。日本人の平均寿命は男性81.05年、女性87.09年であり (厚生労働省, 2023)<sup>1</sup>、日本の総人口に占める65歳以上の割合は男性26.0% (1,574万人)、女性32.0% (2,053万人) であると報告されている (総務省, 2022)。このように親子関係が長期化する中で、高齢になった親の扶養

や介護の問題に子が直面することが多くなると考えられる。藤崎（2015）は、“親世代が本格的な老いの途を歩むようになると、「子→親」という方向の援助が量的に勝るようになり、親子の役割逆転が生じることを指摘している（p.139）。野村（2012）も、“親に養われ成人した子も、親との対等な関係を経て、やがて親を養うようになる”という「扶養—被扶養関係の逆転」について論じている（p.71-72）。他方で、Fingerman（2003）は、かつて子どもの面倒をみてきた母親が高齢になると娘に自分の世話を期待するようになり親子関係における役割の逆転が生じることが、中年期の娘と母親の葛藤や対立の一つの背景にあることを指摘している。杉山（2010）は「経済的安定のための援助」、「情緒的満足のための援助」、「身体的自立のための援助」の3点に対する意識が子が高齢になった親を扶養するという「扶養意識」として扱い、25～60歳に質問紙調査を行っている。そして、全般的扶養意識として「老親自立期待」、「情緒的支援志向」、「伝統的扶養志向」の3因子を抽出し、実親と良好な関係であると感じている者のほうが、親を扶養し、いたわることに積極的な意識を持っていることを報告している。

子が青年期から成人期へ移行するとき、親は中年期から老年期において自らの老いに向き合っていることが多くみられ、子も親の老いを認知し向き合うことになるといえる（池田，2023）。そこで本研究では、子の視点からみた「親の老いの認知」に注目する。池田・佐藤（2008）は大学生、池田（2013）は20代から50代における親の老いの認知によって生じる気持ちを検討している。池田（2023）では、中高年期における主観的老いの経験（若本・無藤，2006）と成人期の子による親の老いの認知内容に関する記述（池田，2013）を参考にして、青年期から成人期の子による親の老いの認知を尋ねる項目を作成している。そして、20歳から39歳へweb調査を実施し、父親と母親の関係への回答を合併し「調査回答者×親の性別」×「項目」という2相データに展開して探索的因子分析を行った上で、それぞれの関係で確認的因子分析を行い、「親の活動性減退」と「親の心理的成熟」の2因子構造の適合性を確かめている。さらに、池田（2023）は年代（20代・30代）と性別（男性・女性）の4群別に、第1水準に親の年代、親の健康状況、親との関係良好度、子の就業状況を、第2水準に親の老いの認知を、第3水準に親の老いに対する態度を置いたパス解析を行っている。その結果、親の活動性が減退することを認知することで子が親の老いに悲哀や不安を抱きやすくなること、親の心理的成熟を認知することは世代継承性のような次世代を育てることを促すこと、娘と母親との関係以外では親の心理的成熟を認知することが親への配慮につながることを示唆されている（池田，2023）。このように、青年期から成人期への移行において親の老いを認知することが親子関係に変化をもたらし、親子の役割逆転（Fingerman，2003；藤崎，2015；野村，2012）や子が親を支えようとしているというかわり方（池田，2018b）のような子による親とのかかわりの発達を促すことが想定される（池田，2023，p.69）。また、Arnett（2014）は、青年期から成人期への移行期（emerging adulthood）において、子が新たに獲得する認識をとおして「感謝」がみられることを論じている。野末（1996）は、成人期から中年期には、精神内界の（intrapsychic）親イメージが修正され、“親に対する理解や見方が変わったり、ある体験や出来事に対する意味づけが変わったり、親を許す気持ちや、感謝する気持ちが出てきたりして、現実の親との関係（interpersonal）も変わりうる”ことを指摘している（p. 73）。これらのことから、子が青年期から成人期へ移行する中での親との関係を検討するにあたり、子が感じている親に対する感謝の心理状態にも着目する。

本研究では、青年期から成人期の子による親の老いの認知が親に対する感謝の心理状態を介して老親扶養意識と関連すると予想する。「親の老いの認知」を“親は年をとったと思うこと”（池田，2013，2023；池田・佐藤，2008）としてとらえ、子の親に対する主観的な老性認知を重視する。そして、「親に対する感謝」を“わたしは親からの恩恵を受けていると感じること”（池田，2006，2018b）としてとら

える。「老親扶養意識」は、“老親が必要とするであろう経済的援助、情緒的援助、身体的援助の3つに対する義務感および積極的な意識”（杉山，2017，p. 135）とする。なお、杉山（2010，2017）では「扶養意識」と表記されているが、子が高齢になった親を扶養するという意識であることを明示するために、本研究では「老親扶養意識」とする。

そして、「親の老いの認知→親に対する感謝→老親扶養意識」という関連の順序性を想定する。「親の老いの認知→親に対する感謝」の順序性について、子が親の老いを認知することで、親に対する感謝の気持ちが大きくなると考えた。池田（2014）は、“親の老いを認知することでこれまでの親との関係がいつまでも続くわけではないことに気づき、親に対する感謝がより実感されるようになる”（p.76）として、男女共に親の老いを認知している方が、父親への「生み育ててくれたことへのありがたさ」、「今の生活をしていられるのは父親のおかげだと感じる気持ち」および母親への「生み育ててくれたことへのありがたさ」を感じていることを報告している。また、男性では親の老いを認知している方が、父親と母親の両方で「自分が苦勞しているのは親のせいだと感じる気持ち」が小さくなり、母親への「援助してくれることへのうれしさ」、「今の生活をしていられるのは母親のおかげだと感じる気持ち」、「負担をかけたことへのすまなさ」は大きくなることが示されている（池田，2014）。「親に対する感謝→老親扶養意識」という順序性については、親へ感謝の気持ちを感じているほど、親を扶養することに積極的な意識が高まると考えた。副田（1993）は、“精神的側面での親の恩にたいしては、報恩としての子の孝は、なによりも親への感謝と心のこもった奉仕の側面が強調される”（p.421）と述べており、日本文化における「恩」や「孝」の概念と親に対する感謝が老親扶養意識と関連していることが指摘できる。このことは、全般的な感謝が受益者から利益供給者への返報に基づく直接互惠性により進化した感情であるという指摘（本多，2010）とも関係し、親に対する返報につながるとも考えられる。また、池田（2023）が変数として投入している親の年代、親の健康状況、親との関係良好度、子の就業状況は、親の老いの認知に加えて、親に対する感謝の心理状態、老親扶養意識とも関係すると考えられた。これらの諸変数を第1水準に、親の老いの認知を第2水準に、親に対する感謝の心理状態を第3水準に、老親扶養意識を第4水準に置いたモデルを設定して分析を行う。

本研究では、息子と娘、そして父親と母親という親子関係の男女差を含めて検討する。塩田（2000）は、母と娘が密着した関係であるがゆえに「介護者－被介護者」の関係が固定化し変化も起こりにくく、娘が親の介護の担い手になりやすい問題を指摘している。池田（2023）も、“成人期の娘にとっては、父親に心理的成熟がみられるかにかかわらず自身が世話をすることを現実的に感じているという可能性”があるとし、親の扶養役割を女性が担うという伝統的な役割意識の影響があることを指摘している（p.82）。本研究でも、池田（2023）と同様に“親子関係の男女差について、生物学的な性のみならず、社会化の過程で身につけたジェンダーや個人の属性による影響の可能性を考えるという立場から研究を進める”（p.71）ことにする。その上で、特に青年期後期から成人期への移行をとらえるために、20代から30代までの年齢範囲で調査を行い、各指標の年代と性別による特徴も検討する。本研究をとおして、青年期後期から成人期において子が親の老いに向き合い、高齢になった親との関係を理解することに貢献できるといえる。

## 目的

本研究の目的は、青年期後期から成人期の子による親の老いの認知について、親に対する感謝の心理状態を介した老親扶養意識との関係を明らかにすることである。そのため、以下の3つの分析を行う。第1に、親の老いの認知、親に対する感謝の心理状態、老親扶養意識の各指標について検討する。第2に、親

の老いの認知、親に対する感謝の心理状態、老親扶養意識の各指標について、年代と性別による得点比較を行う。第3に、親の老いの認知が親に対する感謝を介して老親扶養意識と関連することを確かめる。

## 方法

### 調査回答者

20-39歳の合計800名（男性380名、女性420名）にweb調査を実施した<sup>2</sup>。父親との関係について650名（20代男性156名、20代女性164名、30代男性155名、30代女性175名）、母親との関係について650名（20代男性154名、20代女性162名、30代男性165名、30代女性169名）の回答が得られた。うち500名（20代男性126名、20代女性126名、30代男性124名、30代女性124名）が、父親と母親の両方の関係について回答した。

### 調査時期および手続き

2017年12月にインターネット調査会社（株式会社クロス・マーケティング）を通じてweb調査を実施した。“Web上での調査は様々な年齢・性別の回答者を確保する上で非常に有効”（北折・太田，2009，p.2）であることを考慮した。回答者の負担を軽減するために、父親と母親のいずれかの関係を尋ね、1週間後にもう一方の関係について回答を求めた。

Directed Questions Scale（DQS；三浦・小林，2016）を参考に、“この質問は「非常にあてはまる」（あるいは「全くあてはまらない」）を選んでください”という2項目を設定し、いずれかに誤答を示した回答者は含まれていない。初回調査への誤答は父親で219名、母親で209名、1週間後の調査への誤答は父親で45名、母親で50名であった。

調査にあたっては、調査への協力は任意であり協力しないことで不利益を被ることはないこと、質問への回答をもって調査協力への同意が確認されることを説明した。また、“「親」「父親」「母親」「子ども」という表現が出てきますが、必ずしも血縁関係上にある親や子どもをさしているものではありません。「親」「父親」「母親」と聞いてあなたが思い浮かべる人物について質問にお答えください。ただし、配偶者のご両親については、今回の調査では該当しません。また、「子ども」は、あなた自身の子どもに限らず、広く次の世代の子どもたちを含んだ質問としてご理解ください。”と教示した。親と死別している場合には、調査への回答は求めなかった。

本研究は、著者が所属する機関における人を対象とする研究倫理委員会の承認を得て実施された（承認番号1728）。

### 調査内容

戸籍上の性別、年齢、職業、結婚や子どもの有無、親の年代などに関する質問に加えて、主に次の内容を尋ねた。

**親の老いの認知** 池田（2023）の分析結果に基づいて、「親の活動性減退」と「親の心理的成熟」の2種類の認知について各6項目の計12項目を尋ねた。「親の活動性減退」は、池田（2023）の14項目について、項目作成時の「身体の不調」、「心理社会面の減退」、「志向の転換」という3カテゴリーから2項目ずつ因子負荷量の大きい順に選定した。「親の心理的成熟」は、池田（2023）と同様の6項目を用いた。

“以下の文章が、この1年間の父親/母親の様子にどの程度あてはまりますか。”と教示し、“全くあてはまらない”（1点）、“あまりあてはまらない”（2点）、“どちらともいえない”（3点）、“ややあてはまる”

（4点）、“非常にあてはまる”（5点）の5件法で回答を求め、（ ）内に示した得点を付与した。

なお、1年間の親の様子が思い浮かばないという場合には、最後に親に会ったときのことを思い出して回答するように教示した。

**親に対する感謝の心理状態** 池田（2014）による親に対する感謝の心理状態に関する20項目について、父親と母親の双方について尋ねた。「援助してくれることへのうれしさ」、「生み育ててくれたことへのありがたさ」、「今の生活をしていられるのは親のおかげだと感じる気持ち」、「負担をかけたことへのすまなさ」という親に感謝しているときに感じる気持ちと「自分が苦勞しているのは親のせいだと感じる気持ち」を合わせた5種類の気持ちに各4項目を設定した。

“以下の文章の内容は、現在、あなたが父親/母親との関係のなかで感じている気持ちにどの程度あてはまりますか。”と教示し、“全くあてはまらない”（1点）、“あまりあてはまらない”（2点）、“どちらともいえない”（3点）、“ややあてはまる”（4点）、“非常にあてはまる”（5点）の5件法で回答を求め、（ ）内に示した得点を付与した。

**老親扶養意識** 杉山（2010）の全般的扶養意識に関する質問項目を参考にして、「老親自立期待」6項目（“経済的な扶養をしていれば、父親/母親と同居はする必要はない”など）、「情緒的支援志向」3項目（“高齢になった父親/母親の心の支えになるべきだ”など）、「伝統的扶養志向」3項目（“子どもが父親/母親の老後の面倒をみるのは当然だ”など）の計12項目を設定した。「情緒的支援志向」は、杉山（2010）では“高齢になった親の心の支えになるべきだ”と“親を旅行に誘ったり、楽しみの機会を用意すべきだ”という2項目から構成されていたが、日常の生活において親の相談に乗ることで情緒的に支援することも重要になると考え、“高齢になった父親/母親が困った時には、相談にのる必要がある”という項目を加え、3項目から構成される「伝統的扶養志向」の項目数ともそろえた。さらに、父親と母親で扶養意識が異なる場合があることも想定し、父親あるいは母親の用語を質問項目に補い、それぞれの関係について尋ねた。

“以下の文章は、あなたの考えや態度に、どの程度あてはまりますか。”と教示し、“全くそう思わない”（1点）、“あまりそう思わない”（2点）、“どちらともいえない”（3点）、“ややそう思う”（4点）、“とてもそう思う”（5点）の5件法で回答を求め、（ ）内に示した得点を付与した。

**親の健康状況** “父親/母親の健康についてお答えください。”と教示し、「通院している」、「入院している」、「認知症の診断を医師から受けている」、「わたしが介護している」、「わたし以外の家族が介護している」、「介護サービスを利用している」、「その他」、「特にあてはまる項目はない」の8項目について、あてはまるものをすべて選択するように求めた。池田（2023）で用いた7項目に「認知症の診断を医師から受けている」を追加した。

**親との関係良好度** “あなたと父親/母親との関係はいかがですか。”と教示し、“良い”（5点）、“どちらかといえば良い”（4点）、“普通”（3点）、“どちらかといえば悪い”（2点）、“悪い”（1点）の5件法で回答を求め、（ ）内に示した得点を付与した。

本研究の分析に用いた統計パッケージは、SPSS Statistics 28とAmos20であった。

## 結果

### 親の老いの認知、親に対する感謝の心理状態、老親扶養意識の検討

分析に先立って、調査回答者の属性を示す。会社勤務（一般社員）が男性20代で73名（39.7%）、男性30代で95名（48.5%）、女性20代で50名（25.0%）と最も多かった。女性30代で最も多かったのは専業主婦が69名（31.4%）で、会社員（一般社員）は53名（24.1%）であった。未婚子ども有りが6名（0.8%）、

未婚子ども無しが475名 (59.4%)、既婚子ども有りが222名 (27.8%)、既婚子ども無しが97名 (12.1%)であった。なお算出方法は異なるが、調査と同時期の2017年度の労働力調査における若年層の完全失業率は20～24歳で4.7%、25～34歳で3.7%である(総務省, 2018) ことと比較して、「無職」は86名 (10.8%)と割合が若干多いといえる。

親の老いの認知を尋ねる項目は池田 (2023) より選定したことから、改めて確認的因子分析を行った。2因子から各6項目が影響を受け、すべての因子間に共分散を仮定したモデルで年代 (20代・30代) と性別 (男性・女性) で区分した4群による多母集団同時分析を父親と母親それぞれに行った。測定不変性を確かめるために、因子負荷量、誤差分散、因子間の共分散に等値制約を行った。父親ではGFI=.85、AGFI=.83、CFI=.83、RMSEA=.05であり、母親ではGFI=.83、AGFI=.82、CFI=.79、RMSEA=.05であった。GFI、AGFI、CFIはある程度の適合を示していると考えられ、RMSEAで十分な適合度が得られた。また、「父親の活動性減退」は $\alpha=.83$ 、「父親の心理的成熟」は $\alpha=.79$ 、「母親の活動性減退」は $\alpha=.83$ 、「母親の心理的成熟」は $\alpha=.76$ であり、十分な信頼性が確かめられた。

父親に対する感謝の心理状態に関する5種類の気持ちは $\alpha=.90 \sim .93$ 、母親に対する感謝の心理状態に関する5種類の気持ちは $\alpha=.89 \sim .93$ であり、十分な信頼性が確かめられた。

老親扶養意識を尋ねる項目は杉山 (2010) より一部修正していることから、確認的因子分析を行った。3因子から対応する項目が影響を受け、すべての因子間に共分散を仮定したモデルで年代 (20代・30代) と性別 (男性・女性) で区分した4群による多母集団同時分析を父親と母親それぞれに行った。測定不変性を確かめるために、因子負荷量、誤差分散、因子間の共分散に等値制約を行った。分析の結果、父親ではGFI=.87、AGFI=.86、CFI=.89、RMSEA=.04であり、母親ではGFI=.87、AGFI=.86、CFI=.88、RMSEA=.04であった。GFI、AGFI、CFIは一定水準以上の適合を示しており、RMSEAで十分な適合度が得られた。ただし、母親の老親扶養意識については、制約なしの場合、ならびに因子負荷量のみ等に等値制約を行った場合は、1項目の分散が負の値になる不適解がみられた。また、父親では「老親自立期待」は $\alpha=.80$ 、「情緒的支援志向」は $\alpha=.87$ 、「伝統的扶養志向」は $\alpha=.58$ 、母親では「老親自立期待」は $\alpha=.81$ 、「情緒的支援志向」は $\alpha=.86$ 、「伝統的扶養志向」は $\alpha=.52$ であった。父親と母親のいずれも「伝統的扶養志向」の信頼性係数は十分な数値ではなかったが、社会的な期待や家族からの期待を受けて子が親を扶養するなど家制度に基づく“従来の慣習を意識した内容”(杉山, 2010, p.463)の重要性を考慮して、このまま分析に含めることにした。

各指標について、各因子に該当する項目の素点をそれぞれ合計して項目数で除した得点を各因子に対応する得点とした。

### 親の老いの認知、親に対する感謝の心理状態、老親扶養意識の年代と性別による得点比較

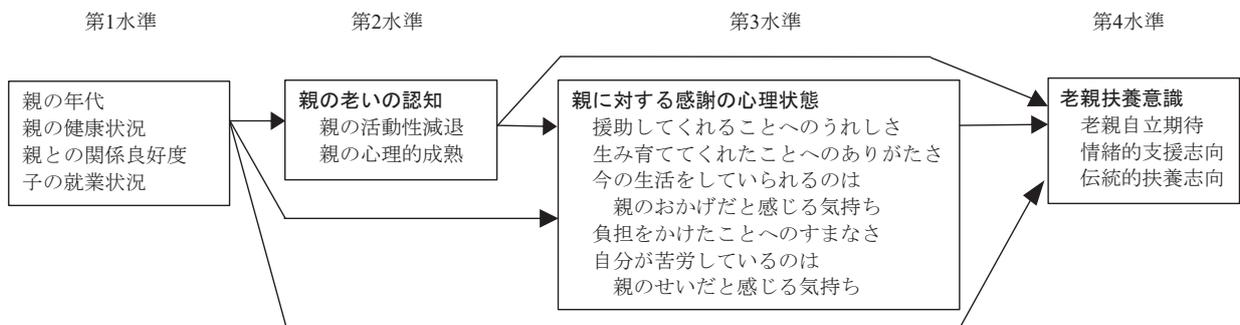
親の老いの認知に関する各得点について、年代 (20代・30代) と性別 (男性・女性) を要因とした分散分析を行った。「父親の活動性減退」には年代の主効果 ( $F(1, 646)=6.37, p=.01, \eta^2=.01$ ) および性別の主効果 ( $F(1, 646)=8.42, p=.01, \eta^2=.01$ ) がみられ、20代よりも30代の得点が大きく、女性よりも男性の得点が大きかった。「父親の心理的成熟」には交互作用 ( $F(1, 646)=4.94, p=.03, \eta^2=.01$ ) がみられ、20代では女性よりも男性の得点が大きかった。「母親の活動性減退」には年代の主効果 ( $F(1, 646)=6.45, p=.01, \eta^2=.01$ ) がみられ、20代よりも30代の得点が大きかった。「母親の心理的成熟」には有意な得点差はみられなかった。

親に対する感謝の心理状態に関する各得点についても、年代(20代・30代)と性別(男性・女性)を要因とした分散分析を行った。父親と母親の両方で「援助してくれることへのうれしさ」(父親: $F(1, 646)=4.04, p=.04, \eta^2=.01$ ; 母親: $F(1, 646)=22.38, p<.001, \eta^2=.03$ )、「負担をかけたことへのすまなさ」(父親: $F(1, 646)=8.57, p<.01, \eta^2=.01$ ; 母親: $F(1, 646)=8.86, p<.01, \eta^2=.01$ )、母親でのみ「今の生活をしていられるのは母親のおかげだと感じる気持ち」( $F(1, 646)=11.71, p<.001, \eta^2=.02$ )、に年代の主効果がみられ、20代よりも30代の得点が小さかった。父親への「負担をかけたことへのすまなさ」には性別の主効果( $F(1, 646)=6.69, p=.01, \eta^2=.01$ )がみられ、女性よりも男性の得点が大きかった。父親と母親の両方で「生み育ててくれたことへのありがたさ」と「自分が苦勞しているのは親のせいだと感じる気持ち」には、有意な得点差はみられなかった。

老親扶養意識に関する各得点についても、年代(20代・30代)と性別(男性・女性)を要因とした分散分析を行った。母親でのみ「老親自立期待」に年代の主効果( $F(1, 646)=5.28, p=.02, \eta^2=.01$ )がみられ、20代よりも30代の得点が大きかった。「情緒的支援志向」について、母親でのみ性別の主効果( $F(1, 646)=19.51, p<.001, \eta^2=.03$ )がみられ、男性よりも女性の得点が大きかった。「伝統的扶養志向」について、父親では性別の主効果( $F(1, 646)=5.97, p=.01, \eta^2=.01$ )がみられ女性よりも男性の得点が大きく、母親では年代の主効果( $F(1, 646)=5.04, p=.03, \eta^2=.01$ )がみられ20代の得点が30代よりも大きかった。

**親の老いの認知、親に対する感謝の心理状態、老親扶養意識の関連**

はじめに年代(20代・30代)と性別(男性・女性)の4群ごとに、親の老いの認知、親に対する感謝の心理状態、老親扶養意識の各得点間の相関係数を父親と母親ごとに算出したところ、年代間での有意な相関には大きな違いはみられなかった。また、先述した分散分析の結果、親の老いの認知、親に対する感謝の心理状態、老親扶養意識に年代の得点差がみられた場合も効果量なし、あるいは小さい値であった( $\eta^2=.01 \sim .03$ )。これらの結果から、20代と30代の年代を合わせることにする。その上で、息子と娘、そして父親と母親という関係ごとの特徴を明らかにするために、男女の2群別に、親の老いの認知、親に対する感謝の心理状態、老親扶養意識との関連を分析する。具体的には、第1水準に親の年代、親の健康状況、親との関係良好度、子の就業状況を、第2水準に親の老いの認知に関する2種類の得点を、第3水準に親に対する感謝の心理状態に関する5種類の得点を、第4水準に老親扶養意識に関する3種類の得点を置いたモデルを設定した。第1水準の変数間、ならびに第2水準、第3水準、第4水準ごとに各変数の誤差項の間に共分散を仮定した (Figure 1)。



注) 第2水準、第3水準、第4水準の各変数には誤差項を付与し、第1水準の各変数ならびに各水準の誤差項間に共分散を仮定した。父親と母親のそれぞれの関係で性別(男性・女性)の2群による多母集団同時分析を行う。

Figure 1 パス解析のモデル

父親の年代は、20代の回答者では50代の親が最も多く（父親：197名、61.6%；母親：221名、69.9%）、30代の回答者では60代の親が最も多かった（父親：225名、68.2%；母親：238名、71.3%）。池田（2023）と同様に、親の年代を60歳未満（0：40歳未満、40代、50代）と60歳以上（1：60代、70代、80歳以上）の2値とした。父親の健康状況については、「通院している」が178名（27.4%）、「入院している」が3名（0.5%）、「認知症の診断を医師から受けている」が3名（0.5%）、「わたしが介護している」が2名（0.3%）、「わたし以外の家族が介護している」が9名（1.4%）、「介護サービスを利用している」が6名（0.9%）、「その他」が5名（0.8%）、「特にあてはまる項目はない」が459名（70.6%）であった。母親の健康状況については、「通院している」が147名（22.6%）、「入院している」が4名（0.6%）、「認知症の診断を医師から受けている」が2名（0.3%）、「わたしが介護している」が0名（0.0%）、「わたし以外の家族が介護している」が1名（0.2%）、「介護サービスを利用している」が2名（0.3%）、「その他」が2名（0.3%）、「特にあてはまる項目はない」が494名（76.0%）であった。池田（2023）と同様に回答人数を考慮して、「特にあてはまる項目はない」とした回答者を「0：心配なし群」、それ以外の項目を選択した回答者を「1：心配あり群」の2値とした。親の老いの関係良好度は5件法であり、平均値（SD）は父親で3.62（1.24）、母親で4.05（1.07）であった。「無職」の回答者の割合が労働力調査（総務省、2018）と比較して若干多いことから、第1水準に子の「就業状況」（0=無職，1=有職）の2値を含めた。このパス解析モデルについて、父親と母親それぞれの関係で性別（男性・女性）の2群による最尤法推定を用いた多母集団同時分析を行った。有意水準5%を基準に有意でなかったパスを削除し、すべてのパスが男女いずれかで $p<.05$ となる結果が得られるまで繰り返し分析を行った（Table 1, Table 2）。分析の結果、父親と母親の双方で、十分な適合度が示された（順に父親、母親；GFI=.98、.96；AGFI=.95、.92；CFI=1.00、.92、RMSEA=.01、.04）。

第1水準と第2水準、第3水準、ならびに第4水準の各変数間のすべての場合にみられる関連に着目すると、「親の健康状況」と「親の活動性減退」の認知に正の関連、「子の就業状況」と「負担をかけたことへのすまなさ」に負の関連がみられた。同様にすべての場合で、「親の関係良好度」と「親の活動性減退」の認知に負の関連、「親の心理的成熟」の認知に正の関連、「援助してくれることへのうれしさ」、「生み育ててくれたことへのありがたさ」、「今の生活をしていられるのは親のおかげだと感じる気持ち」に正の関連、「自分が苦勞しているのは親のせいだと感じる気持ち」に負の関連、「老親自立期待」に負の関連がみられた。

第2水準から第3水準を介した第4水準との関連に着目すると、分析結果は次の3点にまとめられる。第1に、すべての場合で「親の活動性減退」を認知することで「自分が苦勞しているのは親のせいだと感じる気持ち」が大きくなり、「老親自立期待」を高めていた。男性の母親に対する場合を除いて「自分が苦勞しているのは親のせいだと感じる気持ち」が「伝統的扶養志向」を高めていた。また、男性では「親の心理的成熟」を認知することが、父親と母親の双方で「自分が苦勞しているのは親のせいだと感じる気持ち」を低減していた。第2に、すべての場合で「親の心理的成熟」を認知することで「援助してくれることへのうれしさ」、「生み育ててくれたことへのありがたさ」、「今の生活をしていられるのは親のおかげだと感じる気持ち」が大きくなり、「生み育ててくれたことへのありがたさ」と「今の生活をしていられるのは親のおかげだと感じる気持ち」は「情緒的支援志向」を高めていた。「援助してくれることへのうれしさ」は、女性の父親に対する場合を除いて「伝統的扶養志向」を高めており、女性の父親に対する場合ならびに男性の母親に対する場合には「情緒的支援志向」を高めていた。「生み育ててくれたことへのありがたさ」は、父親との関係では男女共に「伝統的扶養志向」を高めていた。なお、男性の母親に対す

Table 1 父親の老いの認知、父親に対する感謝の心理状態、老親扶養意識の関連 (パス解析の結果)

説明変数	目的変数	父親の活動性減退	父親の心理的成熟	援助してくれることへのうれしさ	生み育ててくれたことへのありがたさ	父親のおかげだと感じる気持ち	負担をかけたことへのすまなさ	父親のせいだと感じる気持ち	老親自立期待	情緒的支援志向	伝統的扶養志向
<b>男性(n=311)</b>											
父親の年代		.12 *									
父親の健康状況		.16 **									
父親との関係良好度		-.12 *	.30 ***	.59 ***	.52 ***	.50 ***	.30 ***	-.40 ***	-.22 ***		
子の就業状況					.10 **		-.17 ***			.12 **	.10 *
父親の活動性減退		—	—				.14 **	.16 **			
父親の心理的成熟		—	—	.23 ***	.15 **	.19 ***		-.14 *	.19 ***		
援助してくれることへのうれしさ		—	—	—	—	—	—	—	—		.21 **
生み育ててくれたことへのありがたさ		—	—	—	—	—	—	—	—	.37 ***	.29 ***
今の生活をしていられるのは父親のおかげだと感じる気持ち		—	—	—	—	—	—	—	—	.20 **	
負担をかけたことへのすまなさ		—	—	—	—	—	—	—	—	.12 **	.26 ***
自分が苦労しているのは父親のせいだと感じる気持ち		—	—	—	—	—	—	—	.27 ***		.12 *
$R^2$		.06	.09	.49	.37	.34	.14	.24	.16	.60	.36
<b>女性(n=339)</b>											
父親の年代		.16 **	.11 *								
父親の健康状況		.19 ***									
父親との関係良好度		-.34 ***	.31 ***	.68 ***	.65 ***	.62 ***	.37 ***	-.54 ***	-.18 **		.24 ***
子の就業状況							-.16 ***		-.11 *		
父親の活動性減退		—	—	-.08 *				.16 ***			
父親の心理的成熟		—	—	.18 ***	.18 ***	.15 ***	.18 ***				
援助してくれることへのうれしさ		—	—	—	—	—	—	—	—	.11 *	
生み育ててくれたことへのありがたさ		—	—	—	—	—	—	—	—	.34 ***	.29 ***
今の生活をしていられるのは父親のおかげだと感じる気持ち		—	—	—	—	—	—	—	—	.19 ***	.24 **
負担をかけたことへのすまなさ		—	—	—	—	—	—	—	-.17 **	.10 **	
自分が苦労しているのは父親のせいだと感じる気持ち		—	—	—	—	—	—	—	.28 ***		.15 **
$R^2$		.18	.11	.61	.54	.46	.20	.38	.25	.72	.33
適合度		GFI .98	AGFI .95	CFI 1.00	RMSEA .01						

注) n(人数),  $R^2$ , 適合度以外の数値は、標準化係数である。男女で共通の関連がみられる箇所を枠で囲み、母親においても共通の関連がみられる箇所を網掛けした。第1水準に「父親の年代」(0: 60歳未満, 1: 60歳以上)、「父親の健康状況」(0: 心配なし群, 1: 心配あり群)、「父親との関係良好度」(5件法)、「子の就業状況」(0: 無職, 1: 有職)、第2水準に父親の老いの2種類の認知、第3水準に父親に対する感謝の心理状態に関する5種類の気持ち、第4水準に老親扶養意識の3種類の得点を投入したパス解析を男女による多母集団同時分析によって行った。男女共に「父親との関係良好度」と「子の就業状況」に正の関連(男性:  $r=.20$ , 女性:  $r=.15$ ,  $p<.01$ )、男性でのみ「父親の年代」と「父親との関係良好度」に負の関連( $r=-.14$ ,  $p<.05$ )がみられた。誤差項間の相関係数は、「父親の活動性減退」と「父親の心理的成熟」では男性で $r=.38$ 、女性で $r=.27$ であった( $p<.001$ )。親に対する感謝の心理状態については、「負担をかけたことへのすまなさ」と「自分が苦労しているのは父親のせいだと感じる気持ち」および男性で「援助してくれることへのうれしさ」と「自分が苦労しているのは父親のせいだと感じる気持ち」には有意な関連はみられず、それ以外の誤差項間に男性で $r_s=-.25$  to  $-.71$ 、女性で $r_s=-.36$  to  $-.52$ の関連がみられた( $p<.001$ )。「情緒的支援志向」と「伝統的扶養志向」には、男性で $r=.26$ ( $p<.001$ )、女性で $r=.12$ ( $p<.05$ )の関連がみられた。  
\*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$  \*\*\*  $p<.001$

Table 2 母親の老いの認知、母親に対する感謝の心理状態、老親扶養意識の関連 (パス解析の結果)

説明変数	目的変数	母親の活動性減退	母親の心理的成熟	援助してくれることへのうれしさ	生み育ててくれたことへのありがたさ	母親のおかげだと感じる気持ち	負担をかけたことへのすまなさ	母親のせいだと感じる気持ち	老親自立期待	情緒的支援志向	伝統的扶養志向
<b>男性(n=319)</b>											
母親の年代								-.09 *			
母親の健康状況		.20 ***						.10 *			
母親との関係良好度		-.19 ***	.20 ***	.54 ***	.44 ***	.42 ***	.23 ***	-.47 ***	-.15 *	.12 **	
子の就業状況						-.22 ***	-.23 ***				
母親の活動性減退		—	—		-.09 *		.14 **	.20 ***			-.14 **
母親の心理的成熟		—	—	.28 ***	.27 ***	.18 ***	.17 **	-.12 *			.21 ***
援助してくれることへのうれしさ		—	—	—	—	—	—	—	—	.25 ***	.30 ***
生み育ててくれたことへのありがたさ		—	—	—	—	—	—	—	—	.30 ***	
今の生活をしていられるのは母親のおかげだと感じる気持ち		—	—	—	—	—	—	—	—	.17 **	.17 **
負担をかけたことへのすまなさ		—	—	—	—	—	—	—	—		
自分が苦労しているのは母親のせいだと感じる気持ち		—	—	—	—	—	—	—	.23 ***		
$R^2$		.08	.04	.43	.33	.24	.14	.31	.11	.51	.27
<b>女性(n=331)</b>											
母親の年代								-.10 *			
母親の健康状況		.22 ***						.11 ***			
母親との関係良好度		-.16 **	.19 ***	.72 ***	.59 ***	.58 ***	.22 ***	-.51 ***	-.25 ***	.16 **	
子の就業状況			.13 *			-.17 ***	-.28 ***				
母親の活動性減退		—	—				.10 *	.26 ***			
母親の心理的成熟		—	—	.12 **	.14 **	.13 **					
援助してくれることへのうれしさ		—	—	—	—	—	—	—	—		.17 *
生み育ててくれたことへのありがたさ		—	—	—	—	—	—	—	—	.34 ***	
今の生活をしていられるのは母親のおかげだと感じる気持ち		—	—	—	—	—	—	—	—	.31 ***	.37 ***
負担をかけたことへのすまなさ		—	—	—	—	—	—	—	—		
自分が苦労しているのは母親のせいだと感じる気持ち		—	—	—	—	—	—	—	.33 ***		.14 *
$R^2$		.07	.06	.57	.41	.38	.16	.38	.27	.51	.26
適合度		GFI .96	AGFI .92	CFI .97	RMSEA .04						

注) n(人数),  $R^2$ , 適合度以外の数値は、標準化係数である。男女で共通の関連がみられる箇所を枠で囲み、父親においても共通の関連がみられる箇所を網掛けした。第1水準に「母親の年代」(0: 60歳未満, 1: 60歳以上)、「母親の健康状況」(0: 心配なし群, 1: 心配あり群)、「母親との関係良好度」(5件法)、「子の就業状況」(0: 無職, 1: 有職)、第2水準に母親の老いの2種類の認知、第3水準に母親に対する感謝の心理状態に関する5種類の気持ち、第4水準に老親扶養意識の3種類の得点を投入したパス解析を男女による多母集団同時分析によって行った。男女共に「母親との関係良好度」と「子の就業状況」に正の関連(男性:  $r=.20$ , 女性:  $r=.15$ ,  $p<.01$ )、女性でのみ「母親の年代」と「母親との関係良好度」に負の関連( $r=-.13$ ,  $p<.05$ )がみられた。誤差項間の相関係数は、「母親の活動性減退」と「母親の心理的成熟」では男性で $r=.43$ 、女性で $r=.29$ であった( $p<.001$ )。親に対する感謝の心理状態については、「自分が苦労しているのは母親のせいだと感じる気持ち」と他の気持ちには有意な関連はみられず、それ以外の誤差項間に男性で $r_s=.34$  to  $.67$ 、女性で $r_s=.28$  to  $.57$ の関連がみられた( $p<.001$ )。「老親自立期待」と「情緒的支援志向」には女性でのみ $r=.24$ 、「情緒的支援志向」と「伝統的扶養志向」には男性で $r=.35$ 、女性で $r=.18$ の関連がみられた( $p<.001$ )。  
\*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$  \*\*\*  $p<.001$

る場合は「母親の活動性減退」の認知と「生み育ててくれたことへのありがたさ」に負の関連がみられた。「今の生活をしていられるのは親のおかげだと感じる気持ち」は、男性の父親に対する場合を除いて「伝統的扶養志向」を高めていた。第3に、男性の父親に対する場合ならびに女性の母親に対する場合では、「親の活動性減退」を認知することで「負担をかけたことへのすまなさ」が大きくなっていった。女性の父親に対する場合は、「父親の心理的成熟」を認知することで、「負担をかけたことへのすまなさ」が大きくなっていった。これに対して、男性の母親に対する場合は、「母親の活動性減退」と「母親の心理的成熟」を認知することで、いずれも「負担をかけたことへのすまなさ」が大きくなっていった。この「負担をかけたことへのすまなさ」は、男性の父親に対する場合は「情緒的支援志向」と「伝統的扶養志向」を高め、女性の父親に対する場合では「老親自立期待」を低減し「情緒的支援志向」を高めていた。母親との関係では男女共に「負担をかけたことへのすまなさ」と老親扶養意識との関連はみられなかった。

また、男性では父親への「老親自立期待」を「父親の心理的成熟」の認知が高め、母親への「伝統的扶養志向」を「母親の活動性減退」の認知は低めるが「母親の心理的成熟」の認知は高めていた。

### 考察

本研究では青年期後期から成人期への移行をとらえるために20代から30代にweb調査を実施し、親の老いの認知、親に対する感謝の心理状態、老親扶養意識の各指標について、年代と性別による得点を比較した上で、指標間の関連を検討した。親の老いの認知、親に対する感謝の心理状態、老親扶養意識に年代あるいは性別の得点差がみられた場合も効果量なし、あるいは小さい値であった ( $\eta^2=.01 \sim .03$ )。

分析の結果、青年期後期から成人期の子による親の老いの認知が親に対する感謝を介して老親扶養意識と関連することが示唆された。父親と母親、息子と娘のすべての関係性で、親の心理的成熟を認知しているほど親に対する感謝の気持ちが大きくなり、情緒的支援志向が高まり、親の活動性の減退を認知しているほど自分が苦勞しているのは親のせいだと感じており老親自立期待が高まることがみられた。また、息子は父親の活動性の減退を認知することで負担をかけたことへのすまなさを感じて、情緒的支援志向と伝統的扶養志向が高まることに対して、娘は父親の心理的成熟を認知することで負担をかけたことへのすまなさを感じて、老親自立期待が低減し情緒的支援志向が高まることが示された。なお、杉山(2010)は実親と良好な関係であると感じている者のほうが、親を扶養し、いたわることに積極的な意識を持っていることを報告しているが、本研究では、親との関係が良好であるほど親の活動性の減退を認知しておらず心理的成熟を認知していること、また概ね親に対する感謝の気持ちが大きくなること、親の自立を期待しないことが示された。親との関係の良好さが親の老いの認知と関連することは池田(2023)でも同様であり、さらに親との関係が良好なことで親に対する感謝の気持ちが大きくなることを介して、親を扶養し、いたわることに積極的な意識を持つことを促すと考えられた。

池田(2014)は“親の老いを認知することでこれまでの親との関係がいつまでも続くわけではないことに気づき、親に対する感謝がより実感されるようになる”(p.76)と考察していたが、その気づきに結びつくと考えられる親の活動性の減退を認知することによって、父親と娘の場合を除いて負担をかけたことへのすまなさを感じるという結果であった。この負担をかけたことへのすまなさは、母親との関係では老親扶養意識との関連はみられなかった。青年は父親よりも母親と多くの時間を過ごし感情を共有するという指摘(Smetana et al., 2006)があるように、母親はより身近な存在であり、負担をかけたことへのすまなさを感じることも母親への積極的な扶養意識を持つことがあると考えられた。他方で、親の活動性の減退を認知することで自分が苦勞しているのは親のせいだと感じる気持ちが大きくなり、親自

身が自立することへの期待が強くなることも示された。野末（1996）は老いていく親の世話に対して強い負担を感じる背景の一つとして、“子供の頃からの憎しみや恨みが未解決であるのに、一方で親の世話もしなければならないという、非常に強烈な葛藤を抱えている”という可能性があることを指摘している（p.77-78）。親が年をとって活動性が減退することを認知することで負担感や将来への不安を抱いたり、そのような親の姿に未解消であった親子間の問題が改めて喚起されたりして、自分が苦勞しているのは親のせいだと感じやすくなることも考えられる。また、母親と息子との関係以外では、自分が苦勞しているのは親のせいだと感じることで伝統的扶養志向が高まることがみられ、親自身の自立を期待する一方で従来への慣習を意識して義務感や世間体から高齢になった親を扶養しなければいけないと感じるという状態に陥る場合があることを指摘できる。

青年期後期から成人期の子は親の活動性の減退だけでなく、親の心理的成熟を認知することで、親に対する感謝の気持ちが大きくなり、親をいたわり扶養するという積極的な意識が高まることが示された。この背景として、一つには高齢になった親の心理的成熟に伴い、親への感謝の気持ちを実感できるだけの心理的な余裕を子も持つことができると考えられた。もう一つには、心理的に成熟しながら積極的に人生を生きる親の子であることが意識されることで、これまでの親との関係をふり返り感謝の気持ちが湧いてくるという可能性が考えられる。このことは成人期から中年期に親に対する理解や見方が変わったり、ある体験や出来事に対する意味づけが変わったりすることで、親を許す気持ちや感謝する気持ちが出てきたりするという野末（1996）の指摘とも関係するといえる。

また、指標間の関連の一部では、父親と母親、息子と娘の関係性ごとに異なる特徴がみられた。たとえば、父親と娘を除く関係では援助してくれることへのうれしさを感じるほど、父親と息子を除く関係では今の生活をしていられるのは親のおかげだと感じるほど伝統的扶養志向が高まることが示された。また、娘は父親の心理的成熟を認知することで負担をかけたことへのすまなさが大きくなり、老親自立期待が低減し情緒的支援志向は高まっていた。娘にとって父親は母親と比べて分離した認識を持っていることが指摘されている（水本，2018）ように、父親の心理的成熟を認知することで、これまで分離した認識であった父親が自身にしてきてくれたことを改めてふり返り、負担をかけたことへのすまなさが大きくなることを考えられる。さらに、息子が父親の心理的成熟を認知することで父親への自立の期待が高まるが、母親の心理的成熟を認知することで伝統的扶養志向は高まる一方、活動性の減退を認知することで伝統的扶養志向は低減していた。娘と父親ならびに母親との関係では、親の老いの認知と老親扶養意識の直接の関連はみられなかった。親の扶養役割を女性が担うという伝統的な役割意識の影響（塩田，2000；池田，2023）の中で、娘にとっては親の老いにかかわらず親を扶養するという意識を持っているという可能性も指摘できる。

今後の研究の課題と展望について、次の3点にまとめる。第1に、老親扶養意識を多角的にとらえる必要がある。本研究では母親の老親扶養意識の3因子構造は不安定であり、父親と母親の双方で「伝統的扶養志向」の信頼性係数も十分な値ではなかった。杉山（2010）は全般的扶養意識と合わせて場面による扶養意識や介護負担感も調査しており、このように老親扶養意識を多角的にとらえることで親の老いの認知や親に対する感謝との関連がより明確になるといえる。第2に、老親扶養意識の関連要因を検討することである。パス解析（Table 1, Table 2）の結果では、「情緒的支援志向」で $R^2=.51 \sim .72$ と高い値であることに對して、「老親自立期待」では $R^2=.11 \sim .27$ 、「伝統的扶養志向」では $R^2=.26 \sim .36$ であった。すなわち、本研究で扱った親の老いの認知と親に対する感謝は、老親扶養意識の中でも特に情緒的支援志向に関連する要因であるといえる。老親扶養意識の他の関連要因を検討する上では、池田（2023）が指摘す

るきょうだいの有無や出生順位も影響する可能性がある。第3に、親の扶養や介護の問題により直面しやすいといえる40代以降の成人期への調査を実施することである。本研究における20代、30代と40代以降の成人期との比較検討をとおして、親子関係の生涯発達を明らかにすることが課題である。

## 付記

本研究はJSPS科研費 JP17K13920の助成を受けたものです。Ikeda (2018a) が発表した研究成果の一部を再分析して構成しました。学会等で貴重なご意見をくださった先生方、調査へ協力いただいた皆さんに深く感謝申し上げます。

## 註

- 1：令和4年簡易生命表（厚生労働省，2023）によると、前年の平均寿命と比べて男性は0.42年、女性は0.49年下回っており、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）、心疾患（高血圧性を除く）、老衰などの死亡率の変化が平均寿命を縮める報告に働いていると指摘されている。
- 2：親子関係における精神的自立と親に対する感謝の心理状態との関係を検討した池田（2019）と同一の調査回答者である。

## 文献

- Arnett, J. J. *Emerging Adulthood: The winding road from the late teens through the twenties.* (2ed.) New York: Oxford University Press, 2014, 410p.
- Fingerman, K. L. *Mothers and their adult daughters: Mixed emotions, enduring bonds.* Prometheus Books, 2003, 256 p.
- 藤崎宏子. “成人した子どもと親.” 日本の親子 —— 不安・怒りからあらたな関係の創造へ. 平木典子・柏木恵子編. 金子書房, 2015, p.127-147.
- 本多明生. 進化心理学とポジティブ感情 —— 感謝の適応的意味. 現代のエスプリ. 2010, 512, p.37-47.
- 池田幸恭. 青年期における母親に対する感謝の心理状態の分析. 教育心理学研究. 2006, 54, p.487-497.
- 池田幸恭. 成人期を中心とした親の老いの認知によって生じる気持ちの探索的検討. 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 2013, p.366.
- 池田幸恭. 成人期を中心とした親に対する感謝の検討. 和洋女子大学紀要. 2014, 54, p.75-85
- Ikeda, Y. Relations of awareness of parental aging with gratitude to parents and filial responsibility in Japan: adolescence to early adulthood. EARA (European Association for Research on Adolescence) 2018 (poster), 2018a.
- 池田幸恭. 母親とのかかわり方からみた青年期における母親に対する感謝の心理状態の特徴. 教育心理学研究. 2018b, 66, p.225-240.
- 池田幸恭. 青年期から成人期にわたる精神的自立と親に対する感謝の心理状態との関係. 日本青年心理学会大会発表論文. 2019, 27, p.43-44.
- 池田幸恭. 青年期後期から成人期にわたる親の老いの認知と親の老いに対する態度との関係. 青年心理学研究. 2023, 34, p.67-86.
- 池田幸恭・佐藤有耕. 大学生における親の老いの認知によって生じる気持ちの分析. 筑波大学心理学研究, 2008, 35, p.27-40.
- 北折充隆・太田伸幸. Web調査と質問紙調査の回答比較に関する研究. 金城学院大学論集 人文科学編. 2009, 6 (1), p.1-8.
- 厚生労働省. “令和4年簡易生命表の概況”. 厚生労働省. 2023.07.28.  
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life22/dl/life22-15.pdf>, (参照2023-09-07).
- 三浦麻子・小林哲郎. オンライン調査における努力の最小限化 (Satisfice) を検出する技法 —— 大学生サンプルを用いた検討. 社会心理学研究. 2016, 32, p.123-132.
- 水本深喜. 青年期後期の子の親との関係 —— 精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差. 教育心理学研究. 2018, 66, p.111-126.
- 野村晴夫. “成人期・高齢期.” 発達科学ハンドブック5 社会・文化に生きる人間. 氏家達夫・遠藤利彦編. 新曜社, 2012, p.67-78.
- 野末武義. 親密さのパラドックス —— 成人期から中年期における両親との親密性と自己分化. 現代のエスプリ. 1996, 353, p.69-79.
- 塩田祥子. 老親介護からみる「母-娘」関係のあり方についての一考察 —— 援助の実践に向けて. 皇學館大學社会福祉学部紀要. 2000, 3, p.73-81.
- Smetana, J. G.; Campione-Barr, N.; Metzger, A. Adolescent development in interpersonal and societal contexts. *Annual Review of Psychology.* 2006, 57, p.255-284.
- 副田義也. 日本文化試論 ベネディクト『菊と刀』を読む. 新曜社, 1993, 436p.
- 総務省. “平成29年 労働力調査年報”. 総務省. 2018.  
<https://www.stat.go.jp/data/roudou/report/2017/index.html#kihon1>, (参照2023-09-07).
- 総務省. “統計からみた我が国の高齢者 —— 「敬老の日」にちなんで”. 総務省. 2022. 09. 18.  
<https://www.stat.go.jp/data/topics/topi1320.html>, (参照2023-09-07).

- 杉山佳菜子. 成人子とその親子関係——子世代からみた老親扶養意識を中心に. 老年社会科学. 2010, 31, p.458-469.
- 杉山佳菜子. 女子青年の自己犠牲・自己優先と扶養意識. 鈴鹿大学短期大学部紀要. 2017, 37, p.135-146.
- 若本純子・無藤隆. 中高年期における主観的老いの経験. 発達心理学研究. 2006, 17, p.84-93.

池田 幸恭（和洋女子大学 人文学部 心理学科 教授）

（2023年11月14日受理）